

令和 4 年度 【 学園研究費助成金 < A > 】 研究成果報告書

学部名 現代マネジメント学部

フリガナ ノザキ ユウコ
氏名 野崎 祐子

研究期間 令和 4 年度

研究課題名 超高齢社会における女性のキャリア形成と女子大学・大学院の役割

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	野崎 祐子	現代マネジメント学部	准教授
研究分担者	大串 葉子	現代マネジメント学部	教授
研究分担者	三木 邦弘	現代マネジメント学部	准教授
研究分担者	金南 咲季	人間関係学部	講師
研究分担者	小倉 祥子	人間関係学部	教授

研究協力者：渡部眞也・川井万紀子・小間祐子 RA：三谷響子・河内萌奈（現マネ 4 年）

1. 本研究開始の背景や目的等（200 字～300 字程度で記述）

高等教育の共学化が進む一方で、男女別学の効果を追認する研究も蓄積されつつある。本研究は、初等教育から大学院まで一貫して女子教育に徹するという本学の強みを活かし、①OG インタビュー調査、②キャリア育成センターとの共同調査、③本研究独自のオンライン調査を実施し、キャリア・デベロップメントの渦中にある 20 代女性のキャリア形成ならびにリカレント教育に関する意識等の実態把握を行う。また、これらの結果をもとに分析を行い、「女性が長く働く時代」に求められる大学・大学院での学びや機能とは何かを検証し、最終的には大学・大学院でのキャリア形成支援策へのインプリケーションを得ることを目的とする。

2. 研究の推進方策（300 字程度で記述）

同窓会ネットワークによる戦後女子高等教育調査を除き、ほぼ予定通りに遂行した。
2022 年 12 月：現代マネジメント学部卒業生 6 人を対象としたグループインタビューを Zoom により実施（調査①）
2023 年 1 月 1～16 日：2015 年～2022 年 3 月卒業生（約 1 万人）を対象に卒業時の住所にハガキを送付（調査②）、詳細調査に協力可能な場合はリンクからグーグルフォームに飛ぶ方式（調査③）で実施。2023 年 1 月下旬からは、調査①はインタビューを書き起こし、報告書を作成、調査②③基本的なデータクリーニングは業者に依頼後、RA が FA をまとめるなどして DB を完成させた。基本的な情報は図表にまとめ、データをもとに実証論文を執筆、国際学会にて発表した。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究は、1) 椋山女学園の持つ貴重かつ豊富なネットワークを活用したアンケート調査により、女子教育がライフコースに及ぼした影響について検証を行い、2) これからの女子大の意義と在り方について新しい知見を得ることを目的とするものである。概要は以下のとおり。

1) 本学独自かつ豊富なネットワーク活用と調査、検証

調査① 現代マネジメント学部 2019-2020 年度卒業生に指導教員を通じてコンタクトし、現在の就労環境や大学での学び、後輩への助言や OG ネットワークに関するインタビューを実施した。その結果、①就活時には、長期的なキャリアデベロップメントを念頭に置いていなかったが、働いていくうちに総合職や昇進への意欲が湧いて来たこと、②そのためには大学での学びを現役時代から考えていくことが重要であることなどの意見が寄せられた。

調査② キャリア育成センター共同調査は、同窓会による住所情報の共有ができなかったため、年賀状で卒業時の住所にハガキを送付する形式で実施した。そのため回収率が低くなるのではとの懸念があったが最終的には 1 割程度と、例年と同程度であった。従来のキャリアセンター調査では卒業後 2 時点のみを対象としていたが、今回は直近の卒業生から 8 年分の情報収集ができた点は、成果であったといえる。概要は来年度の研究論集にまとめる。

2) これからの女子大の意義と在り方について新しい知見を得る

調査① インタビュー調査からは、女性のライフコースを視野にいたれたキャリアプランの計画の必要性が示唆された。調査②③ OG ネットワーク形成への興味関心があり、自ら貢献したいとの申し出も多い。一方でリカレント教育についてはあまり関心が寄せられていない現状が明らかになった。大学院教育に関するニーズのさらなる把握が必要である。

調査③ データ分析により、別学は、大学成績や、現在の仕事満足度にプラスの影響を及ぼすことが確認されたが、性別役割分業意識については、統計的に有意な結果は得られなかった。

4. キーワード (本研究のキーワードを 1 項目以上 8 項目以内で記載)

①初期キャリア形成	②大学教育の効果	③single-sex schooling	④リカレント教育
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

1. 学会発表

1) Nozaki, Y. (2023) "The effects of single-sex schooling on careers for young women: Using survey data of graduates from a women's university," International Conference on Gender Studies, (2023/02/26, University of London, Online) Proceedings. 単著・発表者。

2) 報告予定：同上 International conference :East Asian Economic Association, 2023/10/21-22 (Seoul National University). 単著・発表者

2. 論文

上記学会での議論をもとに proceedings に加筆修正、Asian Economic Journal 等へ投稿予定

※本学データをもとにした別テーマの論文も執筆予定。

3. 報告書

本研究で実施した 3 本の調査結果は、(研究報告会で) 公開部分について調整後、『椋山女学園大学研究論集』に投稿する予定。